コラム 3-7　アイデンティティは必要なのか：自分の可能性と限界の認識

『教養としての心理学講座』の Lecture 3 での「アイデンティティ」の説明を読んで，自分の「アイデンティティ」などという面倒なことは今まで考えたことはなかったし，周囲を見ても，そんなものはなくても問題なく生きていけるのではないかと思った人は多いのではないでしょうか。

アイデンティティという概念は，基本的に西洋的な個としての「自己」を前提としたもので，日本のような個よりも集団が優先するような社会では，それほど明確に必要とはされていません。本来，アイデンティティとは，自分の生き方を自分で選択できる社会が前提となっている概念です。したがって，西洋諸国においても，古くから明確に存在したわけではありません。自分の生き方を自分の意思で選べない時代や社会では，決められた生き方（たとえば，職人の家に生まれたので，親の職を継ぐなど）しかなかったので，それについて悩む必要はありません（というよりも，実際上自分の生き方の選択で悩むことができませんし，他の選択肢はそれから逃げることしかありませんでした）。

「自分で自分の職業や生き方を選べないなんて不幸だ」と考える人も多いでしょうが，実はそれほど単純な問題ではないのです。実際には，自分で選べるからこそ悩むのです。自分で選べるといっても，自分の生き方は，食事のメニューのように自由に選べるわけではありません。自分が選びたいと思っても，それがかなえられる（受け入れられる）という保証はありません。これは，就職を考えればわかりやすいでしょう。

ある企業に就職を希望しても，採用されるとは限りません。選択する自由があるということは，選択したことが受け入れられるという保証があることを意味しているわけではないのです。自分が望んでも得られるとは限らないという現実は，否応なしに社会や他者による自分についての評価や認識をつきつけてきます。このとき，自分の可能性とともに限界を理解していないと，自由な選択肢は単に理想（夢）だけで終わってしまいます。自分の可能性を追求し，希望を実現するためには，自分の限界も認識し受け入れること＝自分のアイデンティティを確立することが重要なのです。

世の中，何でもできる人はいませんし，何もできない人もいません。そこで，自分に何ができるか（何ができないか）をきちんと知ることが重要になります。自分の可能性を見つけることは，自分の限界を見つめることでもあります。自分の限界を正しく見つめることで，可能性も見えてくるものです。そして，個人の可能性と限界は，その人の個性，特徴を反映しているはずです。アイデンティティの獲得は，自分らしく生きることでもあるのです。

自分の個性を無視したアイデンティティの獲得は，生きにくい人生をおくることになる可能性があります。その意味で，小学校から大学に至るまで，入学式の来賓などの挨拶でよく耳にする「皆さんには無限の可能性が広がっています」というのは，きれいごとで空手形に過ぎません（本気で信じる人はいないでしょうが）。私だったら，「皆さんには可能性もありますが限界もあります。だからこそ，自分独自の可能性を見つけるとともに，そのとき限界からも目を背けないでください」と言うでしょう（しかし，このようなことを入学式で言う人は，来賓には呼ばれません）。